

# 街を行く

第55回 飯塚 *Iizuka*

## 古き良き男たちのロマン息づく

今回は福岡県飯塚市を訪ねました。ここはかつて炭鉱で栄えた街、歴史の栄枯盛衰とロマンを感じさせる場所です。石炭が国家経営を支える資源であった時代、筑豊炭田のど真ん中にあるこの街はたいへん賑わっていたそうです。しかし、閉山後はその見る陰もなく過去の遺物としてしんみり佇んでいます。いま再生途上にある北海道夕張市も同じような境遇の街のひとつです。最近では、NHKの朝のドラマ「花子とアン」で取り上げられました。主人公の学友柳原白蓮（女流歌人で明治の三代美人のひとり）の嫁ぎ先であったのが飯塚の豪商伊藤家でした。この物語の顛末は割愛しますが、興味のある人はぜひ調べてみてください。

筑豊炭鉱は当初麻生家（麻生太郎元総理大臣の生家）をはじめ3つのファミリー企業が治めていました。そのなかへ裸一貫で飛び込み炭鉱王となったのが伊藤家当主の伝右衛門です。成り上がりで巨万の富を得た男のロマンは彼の生き方そのものかもしれません。

伊藤家の邸宅は、いまは市の財産として一般公開されています。随所に贅が尽くされ、それでいて嫌みがない、むしろ渋さを感じる造りです。伊藤氏は単なる成金ではなくセンスがある人だったのですね。

飯塚を紹介するとき、もう一つ外せないのが「嘉穂劇場」です。一地方の芝居小屋が歌舞伎役者達の目にとまり、いまや全国に名前が知られる存在となりました。こんな立派な劇場があるということは文化が存在する証拠。栄えた街には必ず文化があり、それを披露するハコができます。



嘉穂劇場、かつての街の賑わいを思わせる立派な造り



旧伊藤伝右衛門邸に飾られた座敷籠、炭鉱王の大胆な金遣いとセンスが光る

このハコは自治体の予算消化や国の制度資金援助で建てられるソレとはちょっと違います。違いとは、お仕着せではない必要とされる文化であるかどうかです。高名な建築家が設計した建物を用意しても、中身がないと親しみや愛着が感じられません。産業と共に生きている街には賞味期限が有るのでしょう。でも街は賞味期限が切れても物品のように廃棄処分できるわけではありません。素早く次なるモノを探し出さなければ息絶えてしまいます。街って生きていますからね。

### 南 一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。